

正直の徳に法って名づくという。転じて物事の要点・急所をいう。

▼不失正鵠：的を外れぬこと。

『禮記』「射儀」の「孔子曰、射者何以射、何以聽、循聲而發。發不失正鵠者、其唯賢者乎、若失不省之人、則彼將安能以中」に基づく語。

『漢語大詞典』には、「箭靶的中心」と説明し、『禮記』「中庸」の「子曰、射有似乎君子、失諸正鵠、反求諸其身、鄭玄注、畫布曰正、棲皮曰鵠」（口語訳）射の道は君子の道に似ているところがある。もし正鵠に当て損じたら其の原因は自分の中にあると思うように、君子の道もまた自分の身を反省して欠点を改めるべきである。）の用例を引く。

李咸用の「和友人喜相遇詩之一」にも「且固初心希一試、箭穿正鵠豈無縁」の句が見える。

156 ○小鮮：小さな魚、小魚

▼烹小鮮：政をなすには煩瑣を避くべき喩。小魚を煮るときあまりかき乱せば肉がこわれて味を損ずる。大国を治める場合にも無為にしてかき乱さぬがよいとの喩。『老子』「居位第六十」の「治大国若烹小鮮」の一文に基づく語。

『韓非子』「解老」に「烹小鮮而数撓之則賊其澤」の用例が、また『淮南子』卷十一「齋俗訓」に「老子曰、治大国若烹小鮮、爲寛裕者曰、勿数撓。爲刻削者曰、致其醎酸而已矣」の例が見える。

『菅家文章』「262 国分蓮池詩」にも「魂迷案轡頭羸馬、手拙揚薪爛小鮮」の句が見える。

▼烹鮮：①小魚を煮る。「鮮」は魚の意。

②國を治める方法や能力のたとえ。